

イヴ・シアンピ

1956年当時、日本で海外との合作映画を作ることには難しかった。まず題名の「長崎の台風」に制作会社の松竹から注文が付き、邦題が「忘れぬ慕情」に変わった。

私の履歴書

子 恵 岸

⑭

ったように思う。

最大の問題は撮影時間だった。フランスの俳優の多くには舞台がある。舞台が終わるのは真夜中。夜食をとり、寝るのが朝方なので撮影は昼に始まり、夜8時まで一気に撮る。日本では朝9時に開始、夕方5時6時に夕食だが、フランスのスタッフはそんな時間にはおなかが空かない。「日本の習慣通り、開始は

船技師を追って長崎まで来た恋人役のダニエル・グリューと乃里子役の私が恋のさや当てをする場面。咲阿に近いフランス語を立て板に水で浴びせるのに、私のフランス語では勝負にならなかった。シアンピ監督の口添えで助太刀してくれたのは恋敵役のダニエル。発音からフランス風言い回しまで教えてくれた。そのダニエルが言った。

骨太な人柄 監督に惹かれ

「互いの郷を尊重」決断に魅力

朝9時。夕食時間は5時に日本スタッフ、8時にフランス側と2度に分けるよう」

「イヴはすごい人よ。医大から地下運動に入り、ノルマンディー上陸に加わった。大勢の負傷兵の命を救って勲章をもらったし、戦争ルポを撮って賞も受けたのよ」

シアンピ監督の提案に両国のプロデューサーが驚いた。夕食時間を2度も取ったら制作費に負担が出る。「郷に入れば郷に従う。互いの郷を尊重して仕事をしよう」。そんな決断をしたシアンピ監督に私は魅力を感じ始めていた。

若い軍医だったシアンピはヒトラー邸炎上からナチス占領下にあったシャンゼリゼ大通りをド・ゴール將軍が凱旋するまでを16ミリカメラで撮影し、そのドキュメンタリーが

直前にロンドンやパリを見聞していた私は日仏両国に根付く異なる気質や習慣が感じられて、ハラハラしたり、面白がったりした。当時の日本には「我が聖なる国ニッポンが外国人なんぞに分かってたまるか」というコンプレックス混じりの神経質な誇りがあ

世界的ヒットになっていた。撮休の日、シアンピ監督が私の純和風の住まいを見たいとやって来た。「神棚と仏壇が同室にあるのはなぜ？」と聞かれた私は神仏習合の歴史を英仏習合の手下クソな言葉で必死に説明した。それで彼は私が熱心な信徒だと勘違

待してくれた。初めての1対1にドキドキした。彼には修羅場をくぐってきた人の沈着で深い静けさがあった。寡黙だが知性とユーモアがみなぎり、骨太な人柄に惹かれた。「あなたには好奇心がある。日本も素晴らしいけど、地球上には色々な国があり、生き方がある。僕が招待するからヨーロッパやアフリカと一緒に見てみませんか」

「『卵を割らなければオムレツは作れない』という諺がある。色々な国を見て、それでもやっぱり日本がいいと思ったら帰って来ればいい」

「そんなことしていいの」「あなたは自由なんだ。阻むものがないとしたら、それはあなた自身だけだ」

（これってプロポーズ？）

私は恋に落ちた。



「忘れぬ慕情」の撮影場面

「『卵を割らなければオムレツは作れない』という諺がある。色々な国を見て、それでもやっぱり日本がいいと思ったら帰って来ればいい」

「あなたは自由なんだ。阻むものがないとしたら、それはあなた自身だけだ」

（これってプロポーズ？）

私は恋に落ちた。